

北 米 旅 行 記 (2)

山 本 一 清

(9)

今1933年六月19日から同30日まで、シカゴで開かれた學術會合 “American Association for the Advancement of Science” は、其の第92回總會である。此の會は、米國に於ける凡ての理學を網羅し、今年は Princeton 大學天文臺長 H. N. Russell 教授を會長として、下の各部に別れ、便宜、大小種々の會合を有つことになつてゐる。

A. Mathematicis (數學)	部長 C. N. Moore氏	幹事 E. R. Hedrick氏
B. Physics (物理學)	„ C. J. Davisson氏	„ H. A. Barton氏
C. Chemistry (化學)	„ A. B. Lamb氏	„ J. H. Simons氏
D. Astronomy (天文學)	„ V. M. Slipher氏	„ H. T. Stetson氏
E. Geology & Geography (地質學地理學)	„ R. T. Chamberlin氏	„ K. F. Mather氏
F. Zoology (動物學)	„ A. S. Pearse氏	„ G. R. La Rue氏
G. Botany (植物學)	„ K. M. Wiegand氏	„ S. M. Trelease氏
H. Anthropology (人類學)	„ T. W. Todd氏	„ W. M. Krogman氏
I. Psychology (心理學)	„ W. R. Miles氏	„ J. E. Anderson氏
K. Social & Economic Sciences (社會學經濟學)	„ W. C. Mitchell氏	„ J. Ford氏
L. Historical & Philological Sciences (史學言語學)	„ W. G. Leland氏	„ J. Mayer氏
M. Engineering (工學)	„ C. F. Kettering氏	„ N. H. Heck氏
N. Medical Sciences (醫學)	„ C. F. Stockard氏	„ W. M. Simpson氏
O. Agriculture (農學)	„ A. R. Mann氏	„ P. E. Brown氏
Q. Education (教育學)	„ W. F. Dearborn氏	„ W. S. Gray氏

今回の總會は、言ふまでも無く、シカゴの大博覽會の機縁を以つて此の地に開かれたのであつて、會の意義を世界的にするため、豫め、諸外國の碩學百餘名に賓客として來會せられるや



プラネタリウムの前の天文家たち



記念写真の後に

れも差支へがあつて來會されず、其のほか一般會員中にも、一人として日本人は見當らなかつた。それで、自分が、六月中旬、ワシントンの太平洋學術會議を終へて、會々シカゴへやつて來ることを地方委員長 Ph. Fox 氏が知り、わざわざ手紙を送り、日本よりの唯一の代表者なる意味に於いて、自分は「名譽會員」に推薦せられるの光榮を得た。

(10)

A. A. A. S. のシカゴ總會に於ける天文部は、六月22日から同25日まで、前後4日間のプログラムであり、其のうち、22日は米國物理學會との聯合部會として、シカゴ大學内の新築 International House で開かれ、23日と24日とは、博覽會内の Planetarium で純天文學的論文の發表、24日午後から25日までは郊外 Yerkes 天文臺へ excursion といふ順序であつた。

此の天文部に於ける論文は下の通り。

六月22日午前9時30分. SYMPOSIUM 題 “Spectroscopy and Astrophysics.”
(分光學と天體物理學)

1. T. Dunham 氏, Technique of stellar spectrophotometry and intensities of some stellar absorption lines. (天體分光測定術及び星の吸収線の強さ)
2. A. G. Shenstone 氏, Atomic configuration in spectroscopy. (分光學に於ける原子の構造)
3. W. S. Adams 氏, Astrophysics and the ionization theory. (天體物理學と電離説)
4. O. Struve 氏, Matter in interstellar space. (星辰空間中の物質)

六月23日午前9時30分, シカゴ市プラネタリウムにて.

此の日、最初に Fox 館長の紹介で、Adler 氏 演壇に立ち、一場の挨拶をした。

う、招待狀を發したのであるが、種々の都合上、結局 Appel 博士 ほか31名の學者が來會し、上述の各部會や聯合會を賑はすことゝなつた——我が國の本多光太郎、畑井新喜司兩博士も、特に招待狀を受けたのであるけれど、兩博士何

其後、下記の論文發表に移る。

1. C. J. Creiger 氏, A preliminary table of lines in the spectrum of δ Cephei.
(セフェ座 δ 星のスペクトルにある線の暫定表)
2. L. Berman 氏, The spectrum of R Coronae Borealis. (北冠座R星のスペクトル)
3. H. M. Losh 嬢, D_3 emissions in ζ Tauri. (牛座ゼ星の D_3 發光線)
4. C. S. Beals 氏, The temperature of Wolf-Rayet stars. (ワルフライエ星の溫度)
5. O. Mohler 氏, A determination of the temperatures of Be stars. (Be 星の溫度の決定)
6. R. K. Marshall 氏, A method of determining relative spectrometric temperature. (相對的分光溫度の決定法)
7. O. Struve 氏, The general problem of classifying stellar spectra. (恒星スペクトル分類の一般問題)
8. J. S. Plaskett 氏及び J. A. Pearce 氏, Determination of the K term, the solar motion and the galactic rotation from the radial velocities of 849 O to B7 class stars. (849個のO乃至B7型星の視線速度より、K項と太陽運動と銀河自轉の決定)
9. E. S. Manson 氏, A comparison of the results of four methods of computing the solar motion using the same 9110 stars from the Yale catalogue of bright stars. (輝星目錄エール出版の中より同じ9110星を用ゐ、太陽運動を決定する4種の方法の結果の比較)
10. F. E. Brasch 氏, The earliest astronomical observations in the American colonies and their significance. (アメリカ殖民時代の最古の天文觀測と其の意義)
11. W. C. Rufus 氏, David Rittenhouse as a Newtonian philosopher. (ニュートン流の學者としてのデヴィッド・リテンハウス)
12. 山本一清氏, Kunitomo and his astronomical activities in pre-Meizi era, Japan. (日本の明治以前に於て國友能當の天文研究)
13. O. L. Dustheimer 氏, Laboratory astronomy in a liberal arts college. (一自由學院に於ける天文學實習)

六月24日午前9時30分. シカゴ市 ADLER プラネタリウムにて

14. P. M. Millman 氏, Recent fireball spectra. (近年の火球のスペクトル)
15. C. C. Wylie 氏, Real heights for recent meteors which have dropped meteorites. (近年隕石を伴ひし流星の眞高度)
16. J. Robertson 氏, Method employed in the calculation of eclipses in the Nautical Almanac Office. (航海曆局に於いて日蝕計算に用ゐる方法)
17. Ph. Fox 氏, Orientation of eclipse instruments. (日蝕觀測機械の位置)
18. R. Hooke 氏, Law of internal distribution of densities in bodies of the terrestrial class. (地球に類する天體中の密度の分布の法則)

19. E. Pettit 氏及び S. B. Nicholson 氏, The phase of maximum energy in the light curve of long period variables. (長週期變星の光に於ける極大エネルギーの位相)
20. D. B. McLaughlin 氏, Suggestions as to the interpretation of stellar variations. (星の變光の解説に關する暗示)
21. C. S. Beals 氏, Classification of the Wolf-Rayet stars. (ワルフ・ライエ星の分類)
22. L. B. Andrews 氏, Dark nebulae near S Monocerotis. (一角獣座 S 星附近の暗黒星霧)
23. J. S. Plaskett 氏及 J. A. Pearce 氏, Mean parallaxes and absolute motions of the O to B7 class stars determined from their parallactic motions. (O乃至 B7型星の視差運動より平均視差と絶對運動を求む)
24. W. J. Luyten 氏, The system of 13 Ceti. (鯨座13番星系)
25. J. Stebbins 氏 及 C. M. Huffer 氏, On the distribution of dark matter in the Galaxy. (銀河中の暗黒物質の分布について)
26. A. H. Joy 氏, Evidence for galactic rotation and space absorption from Cepheid variables. (セファイド變星より銀河回轉と空間吸収の證明)
27. R. C. Williams 氏, Evaporated mirrors for reflecting telescopes. (反射望遠鏡に用ゐる蒸發鏡)
28. N. T. Bobrovnikoff 氏, The red titanium oxide system in stellar spectra. (恒星スペクトル中にある赤色チタニウム酸化系)
29. C. Payne 嬢及 D. H. Menzel 氏, Further identifications of forbidden nebular lines (星霧禁と線)
30. E. Pettit 氏 及 F. Sloum 氏, Visual and photographic observations of solar prominences with a Lyot telescope. (リヨ望遠鏡により太陽プロミネンスの眼視及び寫眞觀測)
31. K. Lundmark 氏, Concerning different indicators for metagalactic distances. (大銀河系の距離に對する諸種の尺度について).

天文部會の第2日、即ち六月23日正午、一同はプラネタリウム前庭に於いて記念撮影をした。

同第3日、即ち六月24日の午後、一同は、汽車、或はバス、或は其他の方法で、市外ジェネワ湖畔の Yerkes 天文臺へ遠足することに豫定されてゐた。自分は、甚だ好都合なことに、其の日の正午、Yerkes の若き臺長 O. Struve 君に招かれて、Stevens Hotel で午餐を饗せられ、其の後直ちに、同君の自ら

操縦する自動車に乗せられて天文臺に向つた。

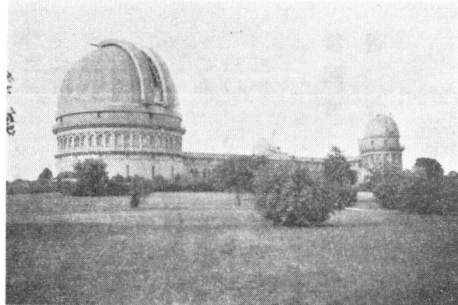
天文臺に着いたのは午後4時。それから、來會者一同、40吋大望遠鏡のドーム内に導かれ、Struve 氏の説明を聞き、Van Biesbroeck 氏の操縦を見た。次で、午後6時から Williams Bay 村内の旅亭で晚餐會があり、夜8時から、又、天文臺に歸つて、Moffit 氏から新しい分光寫真機の説明を聞いた。

夜は、村内の各所に分宿したが、自分は、J. A. Pearce 氏夫妻や、C. E. Furness 女史等と共に、Sawyer 夫人宅に宿つた。

（ 11 ）

翌六月25日、Williams Bay 村内に宿つた天文家たちは、自由解散をした。自分は、朝、天文臺に來つて、圖書室で暫く新着圖書を見、それから、十年前、御世話になつた Van Biesbroeck 教授の家を訪れた。主人を始め、夫人、子女等、皆健在。久しぶりの挨拶をし、2時間ばかり、積る話をした。主人教授とは、Yerkes 天文臺と協同する新テキサス天文臺の計畫等、又、夫人とは、歐洲にみなぎる社會不安及び戦争恐怖等の話をした。ヤキリス天文臺

正午には食事を饗せられ、それから、自分は近くに新築された元の臺長 E. B. Frost 博士宅を訪ひ、午後5時には現臺長 Otto Struve 君の新家庭を訪ひ、最後に Barrett 教授宅を訪ひ、同教授夫妻や令嬢に見送られて



午後6時20分 Williams Bay 驛發の汽車で出發、シカゴに向つた。此の汽車には Van Biesbroeck 令嬢も同車せられた。列車は午後8時10分、北西停車場に着。直ちに島津氏方に歸つた。

（ 12 ）

六月25日(日曜)以後は、A. A. A. S. の會合も、多くは應用理學方面のものゝみとなつた。自分は、無線學に關する講演を時々傍聴したが、其の他は、博覽會や博物館等を見物するために數日を費し、かねて、今後の旅程に關し、汽車會社や汽船會社と交渉を重ねた。そして、六月29日から、一二週間、東

部への旅行に立つこととした。

A. A. A. S. の會合に、シカゴ市へ集つて來たものは約五千人（或は六千人）と言はれてゐた。しかし、驚くべき大規模と混雜の大博覽會の渦中に巻き込まれたため、全國を擧げての此の五千の學者群も、殆んど市の内外に目立たない程の影の淡い存在であつたやうに思はれる。——只、自分としては、此の機會に、天文以外の、數學、物理學、地質學、地理學、無線學、人類學等の諸部會を傍聽し、多少の智見をひろめ、又、思ひがけない學者たちにも出會つた。特に、物理學の N. Bohr, F. W. Aston, A. H. Compton 諸博士、氣象學の J. Bjerknes, W. J. Humphreys, H. H. Kimball, E. R. Miller, 諸博士、數學の T. Levi-Civita 博士、工學の A. P. M. Fleming 博士、生理學の F. Bottazzi 博士等に面接し得たのは幸福であつた。尙ほ、六月19日の夜、博覽會内の Hall of Science の露臺で催された歡迎會其の他の席上で、G. Birkhoff 博士等の舊知に會ひ又、部會の機に多くの舊知天文家に會つたのは、實に大きい喜びであつた。（つゞく）

天文語彙の目録（續き）

久しく「天界」の附録として續刊されてゐた天文語彙の完成本として、山本、村上兩氏共著の『天文語彙辭典』が發行せられたので、此の機に、「天界」舊號を所持してゐる人々のために、こゝに語彙の目録（續き）を掲げる。此の目録の初部は「天界」第七十八號（語彙第十九の後尾）に掲げたから参照されたい。

番號	（ページ）	附録「天界」	首字
一九	（七三—七六）	第七十八號	せの部
二〇	（七七—八〇）	第九十二號	そたの部
二一	（八一—八四）	第九十三號	たの部
二二	（八五—八八）	第九十四號	同
二三	（八九—九二）	第九十五號	ちの部
二四	（九三—九六）	第九十六號	ちの部
二五	（九七—一〇〇）	第九十七號	つての部
二六	（一〇一—一〇四）	第九十八號	同
二七	（一〇五—一〇八）	第九十九號	同
二八	（一〇九—一一二）	第一百號	同
二九	（一一三—一一六）	第一百一號	同
三〇	（一一七—一二〇）	第一百二號	ての部
三一	（一二一—一二四）	第一百五號	との部

校閱者 理學博士 山本一清

著者 一三一 理學士 村上忠敬
一四一九 理學士 森川光治
二〇一三一 理學士 海老恒治